

否定詞による分離不定詞構造

後 藤 弘

〈はじめに〉

筆者は既に分離不定詞構造について2篇の論考を発表しているが、¹⁾ 本稿はその折種々の理由で十分に論じることができなかつた not, never, seldom 等の否定詞の嵌入による分離不定詞構造を扱うものである。この構造の現代英語における生起頻度は、極めて低い。しかし、現代英語の感覚からは信じ難いことであるが、分離不定詞発達の最初期においては、否定詞と目的語が、この構造において最も頻繁に嵌入した要素であった。²⁾ その内目的語が嵌入する構造は、完全に廃用になったが、³⁾ 否定詞が嵌入する構造は、現代英語においても時折見出され、筆者の関心を引いてきた。本稿は、この関心が生み出した幾つかの疑問に対する考察である。先行論考において、不定詞発達の素描、分離不定詞生起の理由及びその史的展望等々について、既に述べているところであり、無用な重複は避けたいが、論旨の展開上一部に重複があることを予め断っておきたい。当然のことながら、筆者は多くの先学の仕事に負うところが大きい。それらは脚注に引用することによって、その主要な部分を示すことができたと考えている。尚引用文献に付した出版データは、使用した版によっている。

〈本論〉

1. Quirk *et al.* (1985) は、次の用例において、not を to の前に出すと、文意が曖昧になるとし、否定詞による分離不定詞の使用に、一応の理解を示している。⁴⁾

His hardest decision was *to not allow* the children to go to summer camp.

1) 後藤弘. 1995. 「分離不定詞構造について」『札幌学院大学人文学会紀要』. 第57号.

後藤弘. 1998. 「分離不定詞構造」『現代英語の語法と文法』(語法文法学会編集). 大修館書店にて1998年夏の出版に向けて準備中.

2—3) Olga Fischer, 'Syntax,' *The Cambridge History of the English Language*, II, ed. Norman Blake (Cambridge: Cambridge University Press, 1992), 329–330.

4) Randolph Quirk *et al.*, *A Comprehensive Grammar of the English Language* (London: Longman, 1985), 496–498.

即ち、否定詞を用いた分離不定詞を避け、次の様に標準的な文に変えると

His hardest decision was *not* to allow the children to go to summer camp.

not は、母文を否定するのか不定詞節を否定するのか、曖昧となり、口語においてすら、

To allow the children to go to summer camp was *not* his hardest decision.

の意味に誤解されるのを防ぎようが無い、と述べている。

分離不定詞に関しては、それが副詞の修飾関係を明確に示し、よって曖昧さを避け、意図するところを正確に伝えると言うコミュニケーション上の絶対的利点を持つことから、⁵⁾ また更に、その使用によって文のリズムを整えることができることから、⁶⁾ また時に副詞の位置を *to* と不定詞との間に移動させることによって、無標の核強勢を特定の語に担わせることができること等々の利点から、⁷⁾ その使用に許容的な者も多いが、嵌入する要素が *not*, *never*, *seldom* 等の否定の副詞の場合は、これに反発的となるのが一般的である。⁸⁾ このような状況の中での Quirk *et al.* (1985) の上の指摘は、極めて興味深いものと言わねばならない。では、現代英語における、否定詞による分離不定詞使用の実体は、如何なるものであろうか。

これに答える前に、先ず分離不定詞と、否定詞による分離不定詞について、若干の考察を試みたい。

2. *To* 付き不定詞が、その指標辞 *to* と不定詞との間に、副詞的修飾語(句)を嵌入させる構造は、Visser (1966)⁹⁾ に拠ると、中英語期の13世紀に初めて文献に見いだされるとされる。しかし、この構造は Reginald Pecock (1395—c.1460) のような例外を除くと、19世紀半ばに至るまで、英語国民に広く用いられることは無かった。これを用いる作家においても、その頻度は低いとされ、Chaucer (c.1343—1400) は2度しか用いていない。Kyd (1558—1594), Spenser (c.1552—1599) の *The Faerie Queene* (1590—1596), Shakespeare (1564—1616), Dryden (1631—1700), Pope (1688—1744) 等にはその使用例が無く、¹⁰⁾ 少なくとも文語においては、16世紀初頭から18世紀末近くまで、例外的なタブー視された構造であったと思われる。¹¹⁾ しかし18世紀末から19世紀にかけて、死滅しかかっていたこの構造は、再び文献に現れ始め、19世紀半ばから、急激にその数を増加し始めるようになった。¹²⁾

3. 19世紀半ばから急激に増大し始めたこの構造は、その頃から文法家の目に留まるどころ

5—6) この構造を語る殆ど総ての論者に言及されており、特定の文献を上げる必要はないであろう。

7) Quirk *et al.*, *ibid.*, 498.

8) 文献は際限無いが、例えば

George O. Curme, *Syntax* (Boston: D.C. Heath & Co., 1931), 460.

Knud Schibsbye, *A Modern English Grammar* (London: Oxford University Press, 1965), 26.

9) F. Th. Visser, *An Historical Syntax of the English Language* II, 1035—1045.

10—13) *Loc. cit.*

となり、指標辞 *to* を屈折に代わる不定詞の不可分な一部と認識する者や、ラテン語を言語の規範とする者達から、容認し難い誤用であると、非難されることとなった。ラテン語の不定詞は屈折によって作られるため、分離されることがないからである。しかし指標辞 *to* と原形動詞の間に、修飾語(句)が入ってはならない積極的理由は何もなく、20世紀に入ると益々この構造は広がりを見せ、今日ではあらゆる種類の英語に散見されるようになっている。

4. しかし19世紀半ば以来の文法家達の非難と、それを信奉する学校教師達の教育の影響は、甚大であった。もしそれが無ければ、今日、分離不定詞はより広く、より頻繁に、英語国民の間で用いられるようになっていたであろうと言われる¹³⁾。この構造を忌避する感情が、英語国民の一部に如何に深く浸透し、その影響が如何に強力且つ持続的であるかは、1981年に英国放送協会(BBC)に寄せられた言語の誤用についての苦情上位20項目のうち、分離不定詞に対する苦情は6位にランクされているとの、George Davidson (1996)の記述からも容易に伺われる。¹⁴⁾ともあれ、分離不定詞の使用に対する制約が次第に薄れつつある傾向の中で、あくまでもその使用を容認しない勢力が健在していると言うのが現状と思われる。Hurford (1994)は、分離不定詞の使用に関しては、許容的(split tolerant)な階層と、反発的(split resistant)な階層から成る、二つの社会方言が存在することを主張している。¹⁵⁾

5. 既に述べた通り、分離不定詞の使用に許容的な階層に属する者も、嵌入する要素が否定の副詞となると、これに極めて反発的である。これは文法書、語法辞典等の記述からも明らかであるが、分離不定詞を比較的多用する作家においてすら、*to not go*の様な否定詞による分離不定詞の生起は、多くの場合皆無か、または極めて少数である、と言う事実からも、更に確認できることである。しかしこの構造も、現代英語に時折見いだされることは、周知のことである。筆者の数多い収集例の中から、①学術書、②辞書のメタ言語、③文学作品の地の文④及び会話文、⑤新聞の地の文⑥及び会話文について、それぞれ20世紀後半の用例を一例ずつ下に示す。

- ① The only escape is *to just not mention* it. (Martin Joos)¹⁶⁾
- ② *to not do* what is expected, needed, or wanted (LDCE³)¹⁷⁾
- ③ Quirk seemed *to barely notice*, as if he were thinking of something else. (Robert B.

14) George Davidson, ed. *Chambers Guide to Grammar and Usage* (Edinburgh: Chambers, 1996), 111.

15) James R. Hurford, *Grammar, A Student's Guide* (Cambridge: Cambridge University Press, 1994), 110—111.

16) Martin Joos. *The English Verb, Form & Meanings* (Madison, Milwaukee: The University of Wisconsin Press, 1968²), 190.

17) Della Summers, ed., *Longman Dictionary of Contemporary English* (Harlow, Essex: Longman, 1995³), s.v. fail, v 2.

Parker)¹⁸⁾

- ④ “...She just didn't want to not say hello at all.” (Judith Rossner)¹⁹⁾
- ⑤ The first, the Defense of Marriage Act, would allow states to not recognize same-sex marriages sanctioned by other states. (*The Boston Globe*)²⁰⁾
- ⑥ “...I learned to never give up...”(*The Boston Globe*)²¹⁾

これらの用例から、否定詞による分離不定詞構造も、一般の分離不定詞構造と同様、現代においても各種の英語に生起することが、明らかである。

6. では否定詞による分離不定詞の現代英語における頻度は如何程のものであろうか。これを統計的に算出することは、技術的に難しい問題を含んでいるが²²⁾、次の調査結果が一応の目安となるであろう。

(A) 新聞英語の場合。²³⁾

英国の高級紙 *The Times*、中級紙 *The Daily Mail*、大衆紙 *The Sun* 及び *Daily Star*、米国の高級紙 *International Herald Tribune* 及び *USA Today* の 6 紙から、無作為に 3 日分を選び出し、高級紙 *The Times*、*International Herald Tribune*、*USA Today* は最初の 3 ページ、中級紙 *Daily Mail* は最初の 6 ページ、大衆紙 *The Sun*、*Daily Star* は最初の 5 ページを対象にして、出現する総ての to 付き不定詞を数え上げ、その中での分離不定詞と否定詞による分離不定詞の数を調査すると、次の様になる。

国	紙種	紙名	to 付き不定詞	分離不定詞	否定詞による分離不定詞
英 国	高級紙	<i>The Times</i>	339	0	0
	中級紙	<i>Daily Mail</i>	252	1	0
	大衆紙	<i>The Sun</i>	191	1	0
		<i>Daily Star</i>	124	2	0
米 国	高級紙	Int.H.T.	341	4	0
		<i>USA Today</i>	414	2	0
総計		6 紙	1661	10	0

18) Robert B. Parker, *Double Deuce* (1992; New York: Berkley Book, 1993), 224.

19) Judith Rossner, *His Little Women* (London: Sinclair-Stevenson, 1990), 125

20) *The Boston Globe*, September 10, 1996, A 22.

21) *Ibid.*, August 16, 1996, A 28.

22) サンプルをどのようにしてバランスよく抽出するか、どの程度の分量が適切かなど、信頼するに足る調査結果を得ることができる基礎資料を策定するのは容易ではない。既存の大コーパスと言えども万全ではない。数億語のコーパスと言えども、英語と言う大海の一粟を掬い上げたにすぎない。文法の仕組が生成する文は無限且つ多様である。また既存コーパスを用いると、同一資料を基にした研究・調査が続出し、英語の実態把握を過つ危険性も予想される。問題を含みながらも、独自の資料を基にした研究・調査には、それなりの意義があろう。

23) 注 1) で言及した拙論「分離不定詞構造」(語法文法学会で出版準備中)の内容の一部を活用。

即ち調査対象紙英米6紙・総日数18日・総調査対象ページ数75ページ中に、to付き不定詞は1661例見いだされ、その内分離不定詞は10例あったが、否定詞による分離不定詞は0例ということになった。これによって、新聞等のジャーナリズム英語では、編集部その他の校閲等によってか、否定詞による分離不定詞の使用頻度は極めて低いことが明らかである。²⁴⁾

(B) 現代の英米小説の場合

芸術と見なされる創作活動の産物である小説においては、ジャーナリズム英語の場合と異なり、著者の文体上の好みがそのまま尊重され、他から一切干渉を受けない特権を享受することができよう。現代の英米の小説を読むと、はたして分離不定詞は数多く見いだされ、これを一度も用いていないような小説に出会うことは、極めて困難な状況である。しかし、分離する要素が否定詞の場合は、小説においてもその生起頻度は極めて低い。一度の調査に数百ページを読んでも、一例にも逢着しないことも極く普通である。この構造を決して用いない作家も多いと思われる。否、大多数の作家は、これを決して用いないと思われる。また、これを使用する作家も、決して多用しているわけではない。作品に描かれている世界の基調を特色付ける為や、登場人物の社会方言を通して、その人物の属する階層を示す目的等で用いられている場合もあり、機械的にその生起頻度を計算することは、無意味でも有り得る。統計的数値を出すことに多々技術上の問題があることを承知した上で、予備調査の際否定詞による分離不定詞が出てきた作品の中から、上述のファクターが比較的少ない作品を選び、一作家一作品に限定して、この構造の生起数を教え、表にしてみると、次のようになった。

	各作品・頁数・生起数							総 数
	(A)	(B)	(C)	(D)	(E)	(F)	(G)	
作 品	(A)	(B)	(C)	(D)	(E)	(F)	(G)	7
頁 数	377	405	387	719	228	239	339	2694
生 起 数	8	3	5	3	2	6	1	28

作品

(A)=William Faulkner, *Light in August* (1932)

(B)=Ernest Hemingway, *Islands in the Stream* (1970)

(C)=Judith Rossner, *Looking for Mr. Goodbar* (1975)

(D)=John Irving, *The Cider House Rules* (1985)

(E)=Ann Beattie, *Picturing Will* (1989)

(F)=Sharlene Baker, *Finding Signs* (1990)

24) 用例が0にも拘らず、敢えて、頻度が低いと表現したのは、調査対象の範囲外に、時折この構造が見いだされるからである。

(G)=Ken Follett, *The Key to Rebecca* (1980)

頁数=使用したテキストに拠る作品の実質ページ数。

生起数=否定詞による分離不定詞の生起数。

(A)–(F)はアメリカの作家, (G)はイギリスの作家の作品である。予備調査に使用したテキストの中から, この構造を比較的多く見い出すことができたことを記憶している作家を中心に, 20世紀半ば前後から20世紀後半にかけての7作家の作品を選び出し, 更に各作家各一作を無作意に抽出したため, 結果的に, この構造により許容的なアメリカの作家が, 7人中6人を占めることになった。それ故, この表の数値は, 既に強調して述べてある通り, 現代英米小説の平均的数値ではない。この構造に許容的な作家の場合の数値であり, そのような作家においてすら, その使用が如何に希であるかを示すものである。

以下に, これらの作品に見いだされた, この構造を例示する。

(A) William Faulkner, *Light in August*.²⁵⁾

1. May be he was glad *to not have to lie* any more.
2. Dont even need *to not listen*.
3. To not let her find out that I dont know, ...
4. His first impulse would be *to not go*.
5. It is like listening in a cathedral to a eunuck chanting in a language which he does not even need *to not understand*.
6. '...so she just decided *to not wait* any longer...'
7. '...He can even bear it *to not look* back, ...'
8. He had at least one thing *to not repent*: that he had not made the mistake of telling the elder what he had planned to say.

(B) Ernest Hemingway, *Islands in the Stream*.²⁶⁾

1. 'You wouldn't like *to just not go* as a present to me?'
2. '...and he had tried *to never lie* to her...'

25) William Faulkner, *Light in August* (1932; Harmondsworth, England: Penguin Books, 1983¹⁴), 52, 62, 141, 209, 239, 241, 318, 360.

26) Ernest Hemingway, *Islands in the Stream* (1970; Harmondsworth, England: Penguin Books, 1977³), 78, 274, 353.

尚この作品には, 次のような, 分離する要素が主語となっている, 極めて珍しい分離不定詞構造がある。

The best way for all to get acquainted is *to all take* a shower. (257)

本稿冒頭でも述べたように, 分離不定詞発達の最初期に最も頻度の高かった分離要素は, 否定詞と目的語の(代)名詞であった。今日でも否定詞と不定代名詞 all は, 低頻度ではあるが, ここに用いられることが多い。しかし今日 all は決して目的語としてはここに出現せず, 母文の主語の同格語として用いられる場合が多い。純然たる主語と感じられる上のような用例は珍しい。目的語を嵌入させた古い構造は, OE期以前の, SOVの語順時代の名残りを示すもので, ME期に消滅している。

3. '...That's what we have *to not hit*...'

(C) Judith Rossner, *Looking for Mr. Goodbar*.²⁷⁾

1. It was wonderful *to not only feel* wonderful but to be with other people who felt wonderful.
2. ...she had some very real boyfriend who she just happened *to not talk* about, either.
3. He seemed *to really not know* what he'd done to her.
4. ...and promised she would do her best *to never let* it happen again.
5. "...So I tend to not meet a question like that head on, as I should."

(D) John Irving, *The Cider House Rules*.²⁸⁾

1. 'I'd like permission *to not be* there, ...'
2. 'We both know where to go - *to not have* the baby', 'Candy said.
3. ...and he was not prepared *to not have* a family again.

(E) Ann Beattie, *Picturing Will*.²⁹⁾

1. "...Tell Mell that it's over, and to please not ask how he is, ..."
2. "...but I hate *to not trust* somebody. ..."

(F) Sharlene Baker, *Finding Signs*.³⁰⁾

1. She is almost whispering, *to not wake* her husband and baby.
2. Already the sun is high enough in the sky *to not shine* in my eyes anymore.
3. "...and we all try *to not laugh* while we listen to Rene lie to her mother, a sweet Christmas Eve lie."
4. ...and I'm having to bite my tongue *to not answer* to Mac's cynical remarks.
5. It's nice *to not have* to explain myself to at least one person.
6. "...This is the bus to Seattle with connections to Portland, San Francisco, L. A., and San Diego, and all points between that you have never seen before and will hope *to never see* again."

(G) Ken Follett, *The Key to Rebecca*.³¹⁾

1. It's impossible *to deliberately not think* about something.

27) Judith Rossner, *Looking for Mr. Goodbar* (1975 ; New York: Pocket Books, 1976³⁴), 137, 190, 223, 238, 270.

28) John Irving, *The Cider House Rules* (1985 ; London: The Black Swan Books, 1992⁶), 221, 502, 545.

29) Ann Beattie, *Picturing Will* (New York: Random House, 1989), 68, 168-169.

30) Sharlene Baker, *Finding Signs* (New York: Alfred A. Knopf, 1990), 58, 125, 147, 181, 198, 227.

尚, *to no doubt* make some woman...happy (144) のような例もあるが, *no doubt* は surely, certainly の意味であるので, 除外した。

31) Ken Follett, *The Key to Rebecca* (1980 ; New York: New American Library, 1981), 305.

7. 前節に示した調査結果によって、今回の調査対象に選ばれた新聞6紙・総日数18日・抽出総ページ数75ページの範囲には、否定詞による分離不定詞の用例は一例もなく、ジャーナリズム英語では、この構造は極めて生起度数が低いことが明らかである。しかし、たまたま今回の調査ではその用例を見い出すことができなかつたが、時にこの構造が新聞等のジャーナリズム英語に見られることも事実であり、それは第5節に示した用例からも、明らかである。

一方現代の英米小説においても、この構造は生起頻度が低いが、分離不定詞に許容的な作家の作品を特に選んで調査すると、個人の文体の好みがそのまま尊重される文学の世界であるため、また意図的に階級方言を使用する必要に迫られる場合などもあるため、ジャーナリズム英語においてよりも、より多く、その用例を見い出すことが可能であった。

8. では今回の調査の結果見い出された、「否定詞による分離不定詞」を検討することにすが、先ずそれが「地の文」で生起しているのか、又は「会話文」で生起しているかと言う観点から調べて見よう。

(A) 新聞英語の場合。

既に示してある通り、今回調査対象となった6紙から抽出した範囲内には、この構造は皆無であった。その為已むを得ず、本稿執筆の準備として、未整理の資料の中から無作為に拾い上げておいた新聞英語の分離不定詞構造の用例を、チェックすることにした。その中に4例の「否定詞による分離不定詞」を見出したので、それを示し、新聞英語の場合について検討してみることとする。

1. The first, the Defense of Marriage Act, would allow states *to not recognize* same-sex marriages sanctioned by other states. (*The Boston Globe*)³²⁾
2. "It is not illegal *to not want* to call home." (*Ibid.*)³³⁾
3. "...I learned *to never give up*" (*Ibid.*)³⁴⁾
4. "Can you imagine what it's like *to not hear* your wife speak to you, or your dog shaking himself and giving a bark?" he says. (*The Weekend Australian*)³⁵⁾

以上の4例の内、最初に示した1例のみが「地の文」で、Editorial (社説) からの引用である。他の3例は総て、記事の中に引用されている「会話文」からのものである。1対3で会話文が優勢である。しかし、前にも述べた通り、校閲その他の制約を受けるジャーナリズム英語では、この構造は人の言葉をそのまま引用する会話文により多く見い出されがちになる、と言

32) Cf. Footnote 20).

33) *The Boston Globe*, April 6, 1997, B 6.

34) Cf. Footnote 21).

35) *The Weekend Australian*, August 27-28, 1994.

う事情が働いた結果と思われる。因に Quirk *et al.* (1985) によると, Survey of English Usage のテキスト(circa 1980) に, 45分間の4人の英国人精神医学者の討論(男性1人・女性3人)が含まれており, その中で19回分離不定詞が用いられているとのことである³⁶⁾。その内訳は to actually Vが7回, to not Vが3回, to sort of Vが2回, その他病 simply, openly, suddenly, emotionally, perhaps, always, all による分離不定詞が各1回, 合計19回となっている。このことは, 英国口語においても分離不定詞は相当用いられていることを示している。「否定詞による分離不定詞」to not Vの形も3回を数え, 2番目に多かったことになり, さほど希有な表現ではなく, 新聞・雑誌等の記事の中の, 特に直接話法の引用文の中に, その形を見出すことがあっても不思議ではない。

(B) 現代の英米小説の場合。

調査対象の7篇の小説に見出された「否定詞による分離不定詞」を, 「地の文」あるいは「会話文」の観点から区別し, 表示すると, 次のようになる。

地の文	会話文	内的独白文
13	11	4

「内的独白文」は, 登場人物の意識の流れの描写によく用いられ, 現代文学に多用される文体上の技法である。多くの場合, 一応地の文の形を取るが, 完全な地の文と会話文の中間的特色を持つもので, Quirk *et al.* (1985) が「自由間接話法」(Free Indirect Speech), 「自由直接話法」(Free Direct Speech) などと呼称している混合話法の類が駆使される。³⁷⁾

地の文には (A) 1, 4, 5, 8, (C) 1, 2, 3, 4, (D) 3, (F) 1, 2, 4, 5 が属し, 会話文には (A) 6, (B) 1, 2, 3, (C) 5, (D) 1, 2, (E) 1, 2, (F) 3, 6 が属する。内的独白文には (A) 2, 3, 7, (G) 1 が属する, ということになる。

全部で28例の, 否定詞による分離不定詞構造の内, 13例が地の文, 11例が会話文であり, ほぼ伯仲する形になっている。

36) Quirk *et al.*, *ibid.*, 498.

37) *Ibid.*, 1032-1033.

「内的独白文」の取り扱いには, 「(自由) 直接話法」・「(自由) 間接話法」よりは「(自由) 直接思考」・「(自由) 間接思考」の用語を用いた方が, 処理も上手く行き, より適切であったかも知れない。

Cf. Leech & Short (1981), *Style in Fiction: A Linguistic Introduction to English Fictional Prose*. London: Longman.

38) 文献を挙げれば際限が無いので, 「日常の会話とそれを反映する informal writing に多い」とする, Crystal の次の啓蒙書と

David Crystal, *Who Cares about English Usage?* (Harmondsworth, England: Penguin Books, 1984), 26.

「イギリスでは主に文語体に見られるが, アメリカでは口語体でも広く使われている」とする, 次の我国の英文法辞典を, 夫々の立場の代表として挙げておく。

荒木・安井編 (1992), 『現代英文法辞典』, 三省堂, 1386.

9. 分離不定詞の生起が、文語に多いか、あるいは口語に多いか、文典の類の記述はまちまちで、揺れがある。³⁸⁾それは取りも直さず、この構造がいずれの文体においても、現代英語では、ほぼ伯仲する程度の生起度数を持つことの証左と思われる。文典類の記述の揺れは、たまたま調査のために集められたデータの、偶然性に拠っていると思われる。「否定詞による分離不定詞」の場合についての文語及び口語における生起頻度は、それが極めて頻度の低い構造であるためか、これに言及している文献を筆者は知らない。しかし前節の表の数値から、事情は「否定詞以外の副詞による分離不定詞」の場合と、全く同じであることが明らかである。調査資料の中に出てきた、28例のこの構造のうち、13例が「文語」である「地の文」からのものであり、11例が「口語」である「会話文」からのもので、ほぼ伯仲する状態であった。残る4例は、「内的独白文」からのもので、(A)7以外は、一応は「地の文」の形を取っているが、「会話文」の特色を濃厚に残す中間的文体となっており、別カテゴリーとして扱い、「地の文」、「会話文」の計算から外されている。

10. 最後に、この度の「否定詞による分離不定詞」の用例の調査・分析を基に、それらの構造が生起する理由について論じることとする。

先ず分離不定詞一般について、多くの用例を集めて、帰納的にその生起理由を考察すると、次のような事情が明らかとなってくる。

1. 不定詞非定型節において、指標辞 *to* は、*that* 定型節における *that* と同様、その本来の機能を失い、節を導く単なる指標と化しており、それゆえ、その節に含まれるものは総て後ろに従属させようとする意識が、作用しがちになる。
2. 不定詞を修飾する副詞を、*to* の直後に位置させることによって、意図するところを正確に表現することができる。例えば、次の(1)、(2)の文は、分離不定詞は避け得ても、副詞の *entirely* が母文の動詞 *failed* を修飾するのか、埋め込み文の不定詞を修飾するのか、不明である。

(1) He failed *entirely* to comprehend me.³⁹⁾

(2) He failed to comprehend me *entirely*.⁴⁰⁾

副詞 *entirely* が不定詞に懸かることを、明確に表現するためには、次の(3)のような分離不定詞構造を用いるか、あるいは文構造を全く変えなくてはならない。

(3) He failed to *entirely* comprehend me.⁴¹⁾

3. 一部の、極めて頻度の高い、助動詞的性格を持つ *V+to* の連鎖において、またそれに近い結合度を持つ一部のコロケーションにおいて、*to* は発音上または意味上、後に続く不定詞よりも、前の動詞との結合がより密になる場合があり、これが分離不定詞

39—41) Martin H. Manser, ed., *Bloomsbury Guide to Better English* (London: Bloomsbury, 1994), 322.

を誘発しがちになる。

(be) going to, have to, used to, (have) got to, want to 等の口語における発音, またそれらを反映する gonna, hafta, useter(useta, uster), gotta, wanna 等の非標準綴からも伺われるように, それら語句の一部は, 極めて強固な結合度を示している。

4. 定型動詞を修飾する副詞の位置は, 助動詞の場合を除けば, 動詞の直前が極めて自然であること, また原形不定詞・分詞・動名詞等の非定型動詞においても, その直前が副詞の位置として極自然であること等の, 類推が働く。she boldly refused the proposal / let us boldly refuse / make us boldly refuse / can boldly refuse / (is) boldly refusing / (is) boldly refused / by boldly refusing 等々からの類推で, to boldly refuse のような表現を生み出しがちになる。

5. 分離不定詞を用いることによって, リズムを整え, 発音しやすく心地よい響きを文に与えることができる。例えば次の(1)の文は自然であるが, (2)の文は不自然でぎこちない響きを持つ⁴²⁾。

(1) I hope to really enjoy myself.⁴³⁾

(2) I hope really to enjoy myself.⁴⁴⁾

6. 分離不定詞の使用によって, 特定の語に, 無標の核強勢を与えることも可能になる。

Well, you ought to at least try.⁴⁵⁾

at least を to の前に出す方法も考えられるが, 不自然な文となるであろう。

11. 前節に上げた, 分離不定詞一般の生起理由は, そのまま, 今回の調査に現れた「否定詞による分離不定詞」の生起理由の説明に, 有効であることが明白である。但し生起理由は, 単純に一つの原因に帰すことはできず, 複数の原因が絡んでいる場合が多い。

7篇の現代小説から取られた28の用例と, 調査対象範囲内には見出されず, それ以外の新聞資料から取られた4例をも含めて, 全部で32の用例が検討対象となる。

全用例中16例が, have to, need to, want to, try to, seem to, be glad to, (would) like to 等に代表されるような, to が先行する語(群)と蜜に結合している場合の生起例である。即ち,

(新聞) 3は learn to, (A) 1は be glad to, (A) 2は need to, (A) 3は, 先行する have to の構造を持つ文の後に, 更に to 不定詞節を独立させて続けたもの, (A) 6は decide to, (B) 1は like to, (B) 2は try to, (B) 3は have to, (C) 2は happen to, (C) 3は seem to, (C) 5は tend to, (D) 3は be prepared to, (E) 2は hate to, (F) 3は try to, (F) 6は hope

42—44) *Loc. cit.*

尚分離不定詞とリズムの関係については古くから多くの学者の言及があるが, 次の文献も参考になろう。

Hans Galinsky, *Die Sprache Des Amerikaners* (Heidelberg: F. H. Kerle Verlag, 1952), 318-319.

45) Quirk *et al.*, *ibid.*, 498.

to の場合である。

通常、これらの場合に起こる分離不定詞は、下の用例 (1), (2) が示しているように、先ず第一に副詞の修飾関係を明確にし、文意から曖昧さを排除することであり、そして、それを可能ならしめているのが、不定詞指標辞 to の先行語 (群) との連語化である。次の 2 文の何れにおいても、副詞を to の前に出すと、それが母文の動詞を修飾するのか、埋め込み文の不定詞を修飾するのか不明となり、曖昧文となる。

(1) The government is planning to secretly test a new and more powerful weapon.⁴⁶⁾

(2) It fails to completely to carry conviction.⁴⁷⁾

しかし、嵌入要素が not, never 等の否定詞である場合は、その動詞を to の前に出しても、文意に曖昧を出来する事は極めて希である。現代英語では want not to が don't want to を意味することは決してない。not は間違いなく後続の不定詞を否定するものである。need の否定は don't need to, need not+原形不定詞であり、*don't need not to (= *don't needn't to) の形は有り得ない。do not need not to の連鎖がもし生起したなら、後の not は間違いなく後続する不定詞を否定するものである。be not to, have not to の、しかも一部の場合を除けば⁴⁸⁾、否定詞 not, never は、不定詞指標辞 to の前であろうと後ろであろうと、その不定詞節を否定するものである。それ故、今検討中の 16 例の否定詞による分離不定詞生起の原因としては、意味の曖昧さを避ける為という第 10 節に示した 6 つの原因の内の第 2 のファクターは、概ね除外してよいであろう。この場合、この構造の生起に関わっている原因は、第 1, 3, 4, 5 であり、就中第 3 が指摘する、不定詞指標辞 to の先行語 (群) との連語化を、その第一の原因として上げるべきであろう。

残る 16 例のうち、(新聞) 2, (新聞) 3, (C) 1, (F) 5, (G) 1 の 5 例は、形式主語 it を受ける実質主語として用いられた不定詞節である。分離不定詞の原因は、第 10 節に示した生起原因の第 1 と第 5 が該当する場合である。就中指標辞 to に不定詞節中の総ての要素を従属させようとする意識を指摘する第 1 を、その主要な原因とすべきである。

次に多いものは、4 例を数える目的を表わす副詞用法の不定詞節であり、(C) 4, (D) 2, (F) 1, (F) 4 がこれに該当する。生起原因の第 1 が該当する場合である。

次は 3 例を数える、(新聞) 1, (E) 1, (F) 2 の場合で、allow...to..., tell...to..., enough...to...等の頻度の高い熟語化した表現における、not または「副詞+not」による分離不定詞で

46) John Eastwood, *Oxford Guide to English Grammar* (Oxford: Oxford University Press, 1994), 146.

47) E. S. C. Weiner & A. Delahunty, *The Oxford Guide to English Usage* (Oxford: Oxford University Press, 1993), 217.

48) 本論第 1 節に取り上げたような場合が該当するが、更にもう 1 例付け加える。

次の文で not を to の前に出すと、not は母文の動詞 is を否定するのか、不定詞節を否定するのか、不明となる。

Her major objective is to not make any further concessions whatever.

ある。have to, used to, want to のような強固な結合力を持つものの場合程ではないが、これらの場合も、現代英語に極めて多用される「不定詞付き対格」(動詞+目的語+to 付き不定詞)、また同じく頻度の高い熟語 enough...to の構造に属し、allow..., tell..., enough...の後に不定詞を予測させる熟語である。不定詞指標辞 to を節中の総ての要素に先行させる傾向が出がちであろう。生起原因の第1が当てはまる場合である。

次は2例を数える (A) 8, (D) 1 の場合で、先行する (代)名詞を修飾する形容詞用法の不定詞である。(A) 8 は代表的な不定詞関係節で、have three children to support, have something to say, have letters to write, the last person to do such a thing 等の類似表現からも理解されるように、頻度の高い構造である。この構造を用いることを話者が決めた時点で、名詞または代名詞の後に不定詞を準備するため、その名詞または代名詞の後で、なにはともあれ、指標辞 to を先ず発話する傾向が出ていても不思議ではない。(D) 1 の場合も、極めて結合度の強い構造で、hope to, plan to, fail to, be able to 等の「動詞または形容詞+to」の構造が、his hope to, their plan to, failure to, her ability to 等のように名詞化した場合と同じである。背後に動詞 permit...to の構造が在り、名詞化した permission に不定詞が続くことを予測し (have no permit to drive / have a permit to hunt のように、permit を「許可書」の意味で名詞化した場合の用法の影響も考えられる)、(A) 8 の場合と同じような心理過程が分離不定詞生起に働いていると思われる。第1の生起理由が該当する場合であろう。

残る2例は、(A) 4 と (A) 7 で、(A) 7 は内的独白文が、引用符を付けられて、独立させて用いられた場合である。前者 (A) 4 は名詞用法の不定詞が be 動詞の補語として用いられた場合であり、後者 (A) 7 は can even bear it to not look back...となっていて、不定詞節が bear の目的語の it と同格となっている構造である。何れの場合も、不定詞節を準備して、先ずその指標辞を発話したための分離不定詞である。特に後者は興味深く、次のような、it と同格の that 節を持つ先行文の影響で

He can even bear it that if he could just give down and cry, he wouldn't do it.⁴⁹⁾

それに続けて、不必要な形式目的語 it を不定詞節の前に嵌入させた

He can even bear it to not look back, even when...

の破格構造を用いたと思われる。それが導く節中の総てに先行する標識と化した that を持つ定型節からの類推で、不定詞指標辞 to をそれが導く非定型節の節頭に立て、分離不定詞 to not look back が生起した場合と判断される。

〈結びに代えて〉

「否定詞による分離不定詞」は、現代の英語文化圏のジャーナリズム英語においても、また文学作品においても、極めて頻度の低い語法であることが明らかになった。しかし、それと同

49) Faulkner, *loc. cit.*

時に、この構造が確かに現代英語において用いられることがあることも、否定できない事実である。文体上の理由から、これに強力に反発する勢力の圧力があるにも拘らず、「分離不定詞」の使用に英語国民は次第に許容的になってきていると思われる。諸種の文典・語法辞典等の記述からも、これは明らかである。「否定詞による分離不定詞」も、本稿で論じた分離不定詞生起の諸原因と同じ生起プロセスを経て、主として、曖昧さを避けるためそれを用いなければならない文脈において、その使用を許容されるようになっていくのではないかと判断される。この構造を、その使用の必要のない場合すら、ルーズに用いる例も多々あり、筆者はこの感を強くしている。現代の英語国民、特に若い世代は、この構造にどのような反応を示すか関心があり、たまたま客員研究員として1年間滞在していたハーヴァード大学言語学科で、学科の協力を得て行なった語法調査に、この問題を含めておいた。その結果を以下に示して、本稿の結びに代える。

William T. Vollmann (1959～) の小説に、次のような一節がある。不定詞指標辞 *to* が、後続する不定詞よりは、先行語により蜜に結合しているため、分離不定詞を生起させた場合である。

I used to not have enough money to spend on whores, the photographer said.⁵⁰⁾

通常この *used to* は助動詞として扱われ、その否定形はイギリス英語では *used not to* (*usedn't to*)、アメリカ英語では *did not use to* (*didn't use to*) であるとされていたが、最近ではアメリカ英語の影響で、イギリス英語においても、*didn't use to* の形が優勢になってきているようである。また最近の若い世代では、*ought to* の否定文及び疑問文においては、*to* を落とす傾向が一般的になってきている、との指摘もみられる。*used to* の場合は如何なものであろうか。この疑問をも含めて、上の Vollmann の用例を基に、次の例文を作り

- (1) I used not to have enough money to spend on books.
- (2) I usedn't to have enough money to spend on books.
- (3) I usedn't have eough money to spend on books.
- (4) I didn't use to have enough money to spend on books.
- (5) I used to not have enough money to spend on books.

ハーヴァードの学生を対象にして、1997年初春実施したネイティブの反応調査の中に組み入れた。その結果は、次の通りである。

Inf. 構文	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O
(1)	×	×	○	○	?	×	?	?	○	??	×	○	×	?	○/?
(2)	×	×	×	×	×	×	×	??	??	×	×	×	×	×	×
(3)	×	×	×	×	×	×	×	×	??	×	×	×	×	×	×
(4)	×	○	?	○	○	○	○	○	?	?	×	×	×	??	○
(5)	○	○	○	?	○	○	?	○	○	?	○	○	×	○	○

○ = acceptable ? = questionable
 × = unacceptable ?? = very questionable

50) William T. Vollmann, *Butterfly Stories* (London: Andre Deutsch, 1993), 113.

- インフォーマントA—Eは学部男子学生。
 インフォーマントF—Jは学部女子学生。
 インフォーマントK—Lは大学院男子学生。
 インフォーマントM—Nは大学院女子学生。
 インフォーマントOは大学女子事務職員。

ほぼ予想通りの結果となったが、一見したところ、アメリカの学生諸君の文法力はどうなっているのであろう、との疑問を抱く者もあろう。しかし Geoffrey Leech (1989) は、used to の疑問文及び否定文に言及し、それらはあまり用いられないとし (not common), 次の文は総て可能ではあるが、ぎこちない表現 (rather awkward) であるとしている。⁵¹⁾

$$\left\{ \begin{array}{l} \text{Did (n't) he use} \\ \text{Used (n't) he} \end{array} \right\} \text{ to } \left\{ \begin{array}{l} \text{be a pop singer?} \\ \text{run a factory?} \end{array} \right\}$$

We $\left\{ \begin{array}{l} \text{used not} \\ \text{usedn't} \\ \text{didn't use} \end{array} \right\}$ to be vegetarians: we gave up eating meat only two years ago.

これはイギリスの学者の指摘であり、主としてイギリス英語についての判断であるが、He used not to... / He usedn't to... / Used he not to...? / Usedn't he...? を通常用いないアメリカ英語においては、アンケートの用例は更にぎこちなく響くであろう。(1)―(4)の構造に対して、多くの学生諸君が否定的判定を下したが、当然の事と思われる。ただし(4)の構造は、もう少し多くの学生諸君が容認することを、予想していた。

また(5)の used to not V の構造を、アンケートに協力した15人の回答者中、11人が容認したことは、新聞・文学作品等の文献資料上での頻度はともかく、現在の英米の若い世代のこの構造に対する言語感覚が、ここまで来ていることを確認させられ、まことに興味深く感じたことであった。その穏当な判断によって、世界的に好評を博している Michael Swan (1995²⁾) は、used to の疑問及び否定文は、格式ばった英語においては、特にイギリス英語においては、次のように用いられることがあるとし、I used to not like opera... を、無条件で容認した形になっている。

I used not to like opera, but now I do. (OR I used to not like opera, but now I do.)
 Used you to play football at school?⁵²⁾

この used to not V の分離不定詞構造については、この文典の初版 Michael Swan (1980) に言及が無く、⁵³⁾ これは最近の傾向を取り入れての記述と思われる。新版出版当初、この構造

51) Geoffrey Leech, *An A-Z of English Grammar & Usage* (London: Edward Arnold, 1989), 498.

52) Michael Swan, *Practical English Usage* (Oxford: Oxford University Press, 1995²), 577.

53) Michael Swan, *Practical English Usage* (Oxford: Oxford University Press, 1980), 614.

の容認は時期尚早であるとの感を、筆者に抱かせた。しかし、イギリス英語でも許容に傾く者が出ている昨今、分離不定詞により許容的な、アメリカ英語の話者であるアンケート協力者達の多くが、この構造を許容しても、筆者には予想外のことではなかった。

本稿の締め括りとして、筆者は決して分離不定詞の無制限な使用に賛同する者ではないことを、明言しておきたい。分離不定詞を用いなければ、文意に曖昧を来したり、極端にリズムを崩してぎこちない響きを文に与えるような時に限り、その使用が許容されるべきと思われる。

(ごとう ひろし 本学人文学部教授 英語学・言語学専攻)